

## 僕ができること

宇部市立東岐波中学校3年 富永 雅貴

「人権」について考える時、いつも思い出す苦い記憶が僕にはあります。

約八年前、母が県外に住む知人の家に、僕と姉を連れて訪問しました。その家の当時大学生の二人のお姉さんは、手で暗号のようなことをして話していました。手話でした。まだ小学校の低学年だった僕と二つ違いの姉は初めて見る手話に驚き、その場にいる人の中で「お姉さんたち二人にしかわからない」という特別さに格好良さを感じました。話を聞くと、お姉さんたちは地元の聴覚障害者を支援するボランティア団体に所属していて、忘れないようにふだんから姉妹で手話を使うことを心掛けていたとのことでした。僕たちが興味をしめしたことが嬉しかったのか、ちょうどその日がお祭りだったので「一緒に行こう。」と誘われ、ついて行きました。僕たちが着く頃には、集合場所の交流センターに仲間が集まっていました。二人が僕たちを紹介すると、みんな笑顔で拍手をして迎えてくれました。少しして、一人のお兄さんが笑顔で話しかけてくれました。けれど僕は、そのお兄さんの体の底から出るような声に驚き、姉の後ろにかくれてしまいました。「怖い」と思ったのです。初めて聞く、聴覚障害をもつ人の声でした。

僕は普段から、車いすの人とエレベーター前で出くわせばボタンを押してあげたり、目の見えない人が歩いていたら点字ブロックの上に何かないか気になったりする性格でした。自分は人に優しくできる人間だと思っていたので、そのお兄さんの声に抱いた気持ちに後ろめたさを感じました。うまく表現できないけれど、これまでは障害者と接する時、視覚から得る情報で知らないうちに心が準備していたのだと思います。けれど聴覚障害は外見からはわからないので驚いたし、本当の自分が出たのだと思います。きっとその時の僕は異様なものを見る目でお兄さんを見ていたと思います。お兄さんへの申し訳なさ、自分の心の狭さを感じ、それが今までも苦い記憶となって残っています。

当時、低学年の僕を母は毎日歩いて迎えにきてくれました。その縁で見守り隊のおじさんと仲良くなり、僕を待つ間、よく二人で話をしていました。その日は将来の話をしていて「この子はまだ決まっていなくても、お姉ちゃんは『耳の聞こえない人の役に立ちたい』と言って手話通訳士になるのが夢なんです。」と母は言いました。おじさんはすごく喜ばれ、後日、家まで自分の使っていた手話の本を届けてくれました。その時まで姉の将来の夢を知らなかったけれど、あの出来事がきっかけになったのは間違いないと思いました。それはもう昔の話で、姉の夢は今では手話通訳士から福祉系の学校の教員に変わりました。形は変わったけれど、今でも手話などで聴覚障害者の役に立ちたいと願う気持ちは変わっていません。もう亡くなってしまったけれど、本をくださったあのおじさんの「頑張る人の為に働ける人になってね。」と言う言葉が姉は、いつも心にあるようです。

その言葉は、僕の心の中にもあります。そして当時はわからなかったけれど、成長して視野も広がりいろいろなことが理解できるようになった今なら、あのお兄さんと仲良くできると思います。あの時、お兄さんは手話でも良かったのに声にだして話してくれました。ひょっとしたら、声をだすことにためらいがあったかもしれません。やっとお兄さんの勇気と優しさがわかるようになりました。僕は中学3年になり将来を真剣に考えなくてはならない時期になりました。おじさんの言葉を胸に秘め、姉は障害者や弱い人の為に働くことをめざしています。僕は障害者に限らず、多くの人や出来事を理解できる人を育てるために幼稚園教諭になりたいと思っています。差別、偏見、あらゆる人権問題は個々の視野の狭さから起きていると思います。幼いうちから視野を広げることにより、現在ある様々な問題を許容できる人間が増え、人権問題の減少につながると思っています。小学生の時「障害者の気持ちになって」というテーマで話し合う授業がありました。その時の僕は「障害者ではないので本当は何に困っているかわからない。」というのが正直な気持ちでした。それは今も同じです。しかし、僕は社会にある様々な人権問題に苦しむ人の立場にたち、本当の理解はできないかもしれないけれど、困っている人の話を聞いてできるだけ理解しようとする人間になりたいです。そして将来の夢として、その気持ちを次世代の子供たちにつなげていきたいと思っています。

ひょっとしたら、姉も僕も、あの日の出来事がなければこんなふうには考えことはなかったかもしれません。だからあの出会いに感謝し、難しいかもしれないけれど、人を尊重する優しい社会の実現を信じて、自分の夢に向かって努力していきたいと思っています。